

血と青空

— 上演決定稿 —

北村
想

1980年、WHO（世界保健機構）は天然痘の絶滅を宣言した。痘瘡のウイルスはロシアのウイルス研究所と、アメリカのアトラン

タにある国立防疫センターに600個のサンプルとして冷凍保存され、1999年六月三十日に焼却処分されることになっている。

焼却処分の執行は、もっと早い予定であったが、軍から「もし、そのウイルスがテロによって持ち出されるか、また秘密のうちに隠しもっている国が化学兵器としてこれを使用した場合、ワクチン製造の対処の方法がない」という意見で延期されたのである。

イギリスの生物・化学兵器研究所の所長グラハム・ピアフは語る。「もし、ある国が痘瘡ウイルスを少しだけ変化させて、いまある天然痘ワクチンを無効化するウイルスをつくって、それを兵器として使用した場合、私たちはそれにどう対処するのか？」

（生田 哲 『ウイルスと感染のしくみ』より）

1999の年、第7の月、

大いなる恐怖の王、天より来たる

アングルモアの大王を甦らさんと

その先も後も火星（マルス）がとぎれなく続べん

シエル・ドゥ・ノトルダム 『サンテユリ』

10巻―72番

登場人物

男1(クロ)

男2(カズ)

運ばれてくる女

高村医局長

金田医師

少年(キリコ)

古川事務局員

牧師(千堂)

掃除の男

看護婦たち

・桐花婦長

・三田鳥サチエ

・猪熊ユキミ

・由利カエデ

・卯の花チズ

いま、私の空にある青空を、この青空をなんと形容すべきだろう。

一点の濁りもなく晴れわたる蒼空。

白い雲がとつぜんにまき起こり、私の頭上で疾風のように渦巻いて、きえていく。

水滴の音が金属を弾いているのを私の耳は聞く。

風すらキーンと鳴いて青空をわたっていく。

死も愛も、生も恋も、命も無限も、刑罰も反抗も、世界はすべてここにある。

1999年、7月。

リゾート地にある、とある小さな神経科療養病院の屋上。

その屋上の片隅で、じっと無言のまま、彼方の空に視線を投げている。ジャマ姿の少年がいる。

階下からは、ブラームスが聞こえている。

高村医局長と、金田医師がやってきた。

高村 「見下ろしながら）ブラームスね。

金田 「小島さんですわ。毎日聞いてらっしゃるようです。

高村 「音楽療養ですね。

金田 「はい。おすすめしたら、けっこういいみたいで。

高村 「ここは日がよくあたっているのに涼しいわ。それに、いい空気ね。

金田 「ええ。職員も患者さんも、よくこの屋上にあがってきます。

高村 「山から吹き降ろす風のせいかしら。」

金田 「とって、冬、それほどの寒さも感じませんけど。」

高村 「きつと、温暖な海が近いせいね。」

金田 「リゾート地域ですから。」

高村 「療養所の立地には理想的ね。」

金田 「なにか、御相談とお聞きしましたが。」

高村 「しばし、黙考すると」金田さん、あなた、ウイルスの定義、できますか？

金田 「ウイルスの定義ですか。あの、それは、生物学的にですか、医学的にですか。」

高村 「どちらでも、結構よ。」

金田 「はい、えーと、ウイルス。．．その大きさは、超顕微鏡的であり、すなわち、ミリミクロンの単位で、生物に寄生して増殖する微粒子。．．でしょうか。ああ、それから、細胞内には、遺伝子があるだけで、ミトコンドリアやリボソームを持たないので、生物とも言い難い。」

高村 「まあ、そうね。」

金田 「高村医局長なら、なんと、定義されます？」

高村 「そうね。．．ウイルスとは、直径0，3ミクロンよりも小さい穴を通過でき、ホストに感染する能力をもつ 何か」よ。」

金田 「何か」．．ですか。」

高村 「もつとも単純なウイルスは、カプシド（蛋白質でできたコート）と核酸（DNAもしくはRNA）しかもつてないもの。これを生物と呼んでいいのかどうか。しかも、ウイルスは、それ自らでは生きることができない。ホストにパラサイトして増殖するしか、生きるすべがない。おまけに寄生されるや、ホストは感染、発症、死にいたる場合もある。私は、ときどき考えることがあるわ。」

ウイルスが先か、私たちのようなホストが先か。まるで、ニワトリが先か玉子が先か、ね。私たちのような複雑な生物が先に生まれて、その後ウイルスのような単純な何が生まれるということは、進化学的には考えづらいけど、先にウイルスだけが存在するということは不可能だしね。

金田 「じゃあ、同時に誕生したんでしょうか。

高村 「祖先は一緒かも知れないわね。種の起源としては同一かも。にしても、この地球上のあらゆる生物種よりさらに多く、ウイルスの種類があるということは、何故なのかしら。おまけに、両者は敵対関係にあつて、どう考えても、ウイルスの存在する理由や価値といったものが、分からないときてるんだから。

金田 「地球外の、空から降つてもきたんでしょうか。（空をみる）

高村 「そうね、宇宙空間では、ウイルスの生命力は地上の十倍くらいになるって実験の結果もあるくらいですからね。（と、空をみる） スゴイ青空ね。

金田 「ええ、怖いくらいに透き通ってますね。

高村 「まるで、地上の惨劇が嘘のようね。

金田 「高村の苦渋の表情を一瞥して） はい。

高村 「視線をもどすと） 看護婦さんを集めておいて頂戴。大事な話があるの。

金田 「じゃあ、いよいよ、この療養所を。

高村 「着任してひと月あまりで、こんなことになるなんて、思いもしなかったわ。でも、しかたないでしょう。こういう事態なんだから。

金田 「でも、私たちは、神経科が専門ですし、ここは、保養地につくられた施設ですから。闘う相手が違うのでは。

高村 「むこうは闘う相手を選ばないわよ。私たちも、闘わなくてはならないわ。死に瀕するひとに

抗不安剤や抗うつ薬を投与することもできるし、しばしの苦痛から逃れるための睡眠薬も使えるし。
金田 「そうですね。そちらのほうからのバック・アップというか、サポートは可能ですね。分かりました、医局長がそう御決断なさるなら。しかし、それ以上に私たちに何かできるでしょうか。」

高村 「金田さん、いい、私たちは院長と理事たちの幾人かをあいついで失ったのよ。しかも犠牲者としてね。院長や理事を、犠牲者として亡くしてしまっただけで、私たちは私たちに闘うべきでしょう、犠牲を強いたものに対して。これは医師として、医学を志す者としての意地でもあるわ。」

金田 「はい、そのとおりですね。」

高村 「何ができるか、やってみくちや、分からないわよ。」

金田 「はい。私も医者です。闘います。」

高村 「1999の年、第7の月、」

大いなる恐怖の王、天より来たる

アングルモアの大王を甦らさんと

金田 「なんですか、それは。」

高村 「あなたが、さつき、ウイルスは空から降ってきたんじゃないかって、いったので、ふと思いついたのよ。『サンテユリ』よ、ミシエル・ドウ・ノトルダムの子言よ。」

金田 「ああ、『諸世紀』とかいう、ノストラダムスの大予言って、いつときブームになった予言の本ですか。」

高村 「『諸世紀』は誤訳なの。正しくは『百詩篇集』っていうの。英語訳を転じて翻訳するとき間違ったらしいわ。」

金田 「高村先生は、予言の類を信じてらっしゃるんですか？」

高村 「(金田をみると) ああ、そうですね、あなたは、クリスチャンだったわね。」

金田 「ええ、私は、聖書以外の予言は信じていません。」

高村 「私だって、信じてないわよ。そんな、予言なんて。ただ、ちよつと、そういう文句を口ずさんでみたくなるようなムードになっただけよ。それに・・・」

金田 「え？」

高村 「ノトルダムって、本職は私たちと同じ医者だったらしいの。」

金田 「そうなんですか。」

高村 「それを、ちよつと思ひ出したのよ・・・ああ、ほんとに青い空ね。」

金田 「あの、じゃあ、早速、看護婦さんたちを集めます。場所は？」

高村 「そうね、看護局や詰所じゃ、患者さんたちが騒ぎになるかも知れないから、院長室を使いましょう。」

金田 「分かりました。」

高村 「よろしくね。私は、通信ネットを使って、もう少し情報を收拾してみますから。」

金田 「はい、では、後ほど。」

高村は、去っていく。

金田、空をみている少年に近づくと、

金田 「何か、みえて？」

少年 「・・・」

金田 「(同様に空をみて) スゴイ青空ね。」

少年は、金田には応えず黙したまま、場所をかえた。金田も、仕方なさそうに去る。

2

男がふたりがかりで、女を運んでくる。脇に抱えるようにして、まるで、肉の塊でも運搬しているふうだ。

女は眠っているのか、気絶しているのか、死んでいるのか、分からない。

男たちは、女を屋上の隅に座らせると、オブジェに女の手首を縛りつけた。壊れたマリオネットのような女。うなだれて、微動だにしない。

男たちは、傍らのベンチに腰をおろした。

男1 「昨日、ママが死んだよ。

男2 「え？

男1 「昨日、俺の母親が死んだんだ。

男2 「ああ、そうか、おふくろが死んだのか。

男1 「親父がやられて、次はおふくろだ。

男2 「女性が死ぬのはめずらしいんじゃないのか。

男1 「確率では、男1000人に対して、女は一人だって聞いたよ。

男2 「そうか、じゃあ、女性もやっぱりやられるのか。

男1 「性ホルモンだか、遺伝子の染色体のXだかYだかがどうだとか、ニュースでいったのを聞いたよ。

男2 「ああ、俺も聞いた。ウイルスってのは、遺伝子と関係あるんだってな。しかし、そうするとあれかな、ホルモンまで関係しているとすると、男性ホルモンの多い女は危ないってことなのかな。

男1 「おふくろはさ、ホルモンが好きだったからな。

男2 「ホルモンが。

男1 「菌が丈夫なんだ。俺はもっぱら塩タンがいいんだけど、ロースよりも、ホルモンのほうが好きだって、おふくろはいつもいってたよ。

男2 「なんだ、焼き肉のホルモンのことか。そんなもの、関係あんのかな。

男1 「いやあ、分かんないよ。ただ、思い出しただけさ。おふくろが、ほっぺたをくちゅくちゅ動かして、ホルモン食ったときのことをね。

男2 「俺は焼き肉は駄目だな。せいぜいユツケが食えるくらいで、焼いた肉は消化不良をおこして吐いてしまう。

男1 「上品な胃袋なんだね。

男2 「魚は何を食っても平気なんだけどなあ。

男1 「(女をみて) 軽そうにみえても、けっこう重いもんだなあ。

男2 「死体は、特にな。

男1 「慣れないんだよね、この重さに。そろそろ慣れてもいいと思うんだけど。

男2 「いや、俺は、もうずっとこれから先も慣れずにいると思うぜ。この仕事は慣れじゃないな。学習とか経験とかの積み重ねというやつじゃないな。

男1 「じゃあ、何かな。

男2 「無神経とか、無関心とか、そういうのと関係してんじゃないかな。どんどん無神経無感情になっただけって、・・・ああ、それが慣れてってヤツかも知らないな。

男1 「そうだよね。・・・慣れないよね。」

男2 「慣れないほうがいいのさ、こんなこと。」

男1 「そうだよね。」

男2 「(少年をみて) あのこ、また空をみてるな。」

男1 「いや、あれは、空をみてるんじゃないのさ。」

男2 「え、じゃあ、何してんだ？」

男1 「受信だつてさ。」

男2 「受信？」

男1 「電波がとどくらしいんだ。」

男2 「あのこにか？」

男1 「そう。」

男2 「何処から？」

男1 「さあね。」

男2 「へーえ、まあ、さまざまな電波つやつが飛び交ってるだろうから、そのうちひとつくらいは、

あの男のこのアンテナにもひっかかるだろうさ。」

男1 「あのこ、女のこらしいよ。」

男2 「ああ、そういや、そうだったな。そういう病気なんだろ。」

男1 「ああやって、電波を受信しているのも、りっぱなビョーキさ。」

少年が彼らに振り向いた。

男2 「やあ、坊や。電波の具合はどうだ。

男1 「おいおい、俺たちのことがみえるわけないだろ。

男2 「だから、声をかけてみてんのさ。

少年 「僕のこと、呼びました？」

男1 「あれ？」

男2 「聞こえたのかな？」

少年 「僕のこと、呼んだのは、あなた？あなた？どっち？」

男1 「坊や、俺たちがみえるのかい。

少年 「ええ、みえますよ。

男1・2 「（顔を見合わせて）いいアンテナしてるじゃん。

男2 「ああ、呼んだよ。なにしてるのかなって。

少年 「僕がですか。

男1 「そうだよ。

少年 「僕は、

男2 「電波を受信してんだろ。

少年 「え、はい、そうです。どうして、知ってるんです？」

男1 「そりゃあ、君、俺たちがその電波だからだよ。

男2 「おいおい、いいのか、そんなこといって。

少年 「あなたたち、電波？」

男1 「そう。電波さ。

男2 「まあ、波動といったほうがいいかもしれないけどな。

少年 「ハドウ？」

男1 「電波みたいなもんさ。」

少年 「（女に気づいて）その女のひとは？」

男2 「え、ああ、これか。これは、そうだな、どういえばいいかな、（男1をみた）」

男1 「これは、その、うーん、まあ、なんでもないものさ。」

少年 「なんでもないって？」

男2 「気にするほどのものでもないということさ。」

男1 「えっ？おいしい、坊や。すると、君はこの女もみえるんだ。」

少年 「うなづいた」

男2 「そうか、この女もみえるのか。」

男1 「ほう、ビョーキってのも、あながちエライもんなんだね。」

男2 「（話題を変える）空が青いなあ、坊や。」

少年 「うん。真っ青だ。」

男2 「空のむこうから、何か聞こえてきたかい。」

少年 「ああ、聞こえてる。」

男2 「何が？」

少年 「キイインっていう音が聞こえてくる。」

男1 「そうか。それは、空の音だよ。」

少年 「電波かな？」

男1 「電波かも知れないが、空の音だよ。」

少年 「空の音。」

男1 「俺も、坊やつくらの歳の、そういう空の音を聞いたことがあるよ。
少年 「え、ほんとう？」
男1 「ああ、キイインという音だった。俺が最後にみた青空だったなあ。
少年 「最後にみた青空って？」
男1 「最後にみた青空さ。」
少年 「その後は？」
男1 「さあ、その後は、もう。」
男2 「きつと、曇り空ばかりだったんだな。（笑う）」
男1 「生きてたときに最後にみた青空だっていう意味さ、坊や。」
少年 「あなたたち、誰？」
男2 「ひとにはみえなくて、坊やにはみえるものさ。」
少年 「どうしてひとにみえないの？」
男1 「（笑う）」
少年 「どうして僕にはみえるの？」
男2 「（笑う）」
男1 「さてと、今日はこれで、いいんだろ。」
男2 「ああ、そうだな。今日の仕事は終わりだ。」
男1 「じゃあ、行くかい。」
男2 「そうするか。」
少年 「待って。何処へ行くの？」
男1 「心配しなくても、また来るさ。」

男2 「ああ、また、来るから、そのうちに。

男1 「俺たちも、ここが、気に入ってるから。

男2 「君と一緒にだな。」

男1 「じゃあな。」

男2 「またな。」

少年 「うん、また・・・」

男たちは、口笛を歌いながら去った。

3

少年は、女に歩みよって。

少年 「眠っているの？・・・死んでるの？」

女 「私のこと、みえるの？」

少年 「みえるよ。」

女 「そう。」

少年 「あなた、誰？」

女 「私はたとえていえば、プロメテウスなのよ。」

少年 「え？」

女 「ギリシア神話に出てくる神様よ。ひとに火の使い方を教えたために、刑罰を受けて、こんなふ

うに岩にはりつけられるの。そうすると、ハゲタカがやってきて、腸（はらわた）をついばむの。でも、一晩たつと、おなかの傷はもとにもどるのよ。その繰り返しがプロメテウスの刑罰よ。

少年 「刑罰って、何か悪いことをしたの？」

女 「私は、間違ってしまったのよ。」

少年 「間違った？」

女 「そう、間違ったの。だから、こんな刑罰を受けねばならないの。」

少年 「刑罰って、どんな刑罰。」

女 「消えてしまうことも、光になつてしまうこともなく、こんなふう to 晒されることよ。私の姿はみえないひとにはみえず、みえるひとにはみえるの。それが私の刑罰というものよ。何もみえないか、誰にでもみえるか、どちらかであれば、私はそれなりに安心もできる。それはまったく死ぬのと同じ平穩だから。でも、私の刑罰は違うの。私は、私の姿態（スガタカタチ）は、あるひとの目につき、またあるひとの目にはつかない。そういうどっちつかずの死なの。こんなに苦しい死はないわ。私はその死をみてほしいと思うひとにみてもらうこともなく、みてもらいたくないひとに、こうやってみられてしまう。」

少年 「僕にはあなたが、みえるけど、僕にはみてもらいたくなかったの？」

女 「あなたにとiいうわけではないわ。なぜなら、私をみてしまったひとには、私はなべて、私の死んだ理由を、その忌まわしい間違いを語つてきかせなくてはならないからよ。私の刑罰というのは、静かな死をゆるされないことなのよ。」

少年 「じゃあ、僕にも、あなたは、あなたの間違いを語らないといけないの？」

女 「ええそうよ。私の悔やむべき間違いを語らねばならないの。こんな苦しい、悔しいことはないわ。私は間違えたのよ。その間違いを永遠に語らなければならぬのよ。」

少年 「いったいどんな間違いをしたの？」

女 「私は恋をしたの。」

少年 「ええ？そんなこと、誰でもするよ。それが間違いだったの？」

女 「私の恋の相手は、私の先生、教師だったの。とても真面目な先生だったわ。そうしてそのひとは奥様がいらして、子どももいたわ。そうしてね、私にも許婚者がいたの。そんな彼と私が、恋をしてしまったのよ。」

少年 「それが、間違いなの？そういうことって、よくあるようなことだけだ。」

女 「私たちは、互いに身を焦がして抱擁したわ。明日のない恋だったから、溶けるように抱き合ってたわ。ゆるされない恋だったから、私たちは燃えるように唇を重ねたのよ。ところが、彼は奥様と子どもを捨てたの。離別れてしまったの。彼はひとりになった。つまり自由の身になったの。私も許婚を解消した。私自身も自由になった。だから、当然、彼は私に求婚したの。」

少年 「なんだあ、それじゃ、良かったじゃないか。」

女 「そのプロポーズの言葉を聞いて、私は私の恋が終わったことを知ったわ。もう、身を焦がす抱擁も、溶けるような接吻も、燃えるように身体をあわせることも、私の前から姿を消したことに私は気づいた。私はその教師と結婚して、今度は、その教師と彼の奥様がやっていったような、平凡で、退屈な家庭生活をおくらねばならない。しかも、彼の奥様と子どもの幻に苛まれながら。私は初めて気づいた。私たちの許されぬ恋、明日のない恋、そうよ、その恋こそが、ほんとうに恋と呼べる恋だったのよ。私と彼とを結びつけるほんとうの絆だったのよ。それから、私はどうしたと思う？少年 「どうしたの？」

女 「私は絶望したわ。ふいに消滅してしまった恋というものの後を追うように私は、自殺したの。死んだのよ。」

少年 「ふーん、自殺しちゃったのか。

女 「ええ、あまりに空が青かったから。

少年 「え？

女 「今日のこの空のように、あんまりにもその日の空は青すぎたの。絶望と寂寞と荒涼をいっぺんに溶かしこんだような空だったわ。私は急に死にたくなって、死んでしまいたい欲望にさからえなくなつて、手首に剃刀をあてると、それを真っ直ぐにひいた。動脈からほとぼしる血が、空に向かって吹き出すように赤かった。私は赤い色だけの虹をみたような気がしたわ。その私にくだった地獄の刑罰というのが、いまあなたにいったそのことを語ることなの。

少年 「あの男たちは何者なの？

女 「男？

少年 「あんたを運んできた男だよ。ふたり。

女 「さあ、それは知らない。これで、私の話は終わりよ。私はまた、次にあなたのように私をみることのできるひとが現れるまで、こうして、冷たい軀の衣を纏つて、さらし者になっていなければならぬわ。

少年 「ああ、あの、

女 「（目を閉じた）

またあのふたり組の男たちがやってきた。

男1 「重労働だよね。

男2 「もんくはいわないことさ。いったってこの仕事から解放されるわけじゃないんだからな。

男1 「ぎっきので、今日は終わりかなと思ったのね。

男2 「予定が変わるのはしょっちゅうさ。

男1 「今度はどこに運べばいいんだ？

男2 「運んでいるうちに分かるさ。

男たちは女生徒を抱えると、もときたようにもどつていく。

少年 「ねえ、あんたたち。

男2 「ああ、君か。仕事なんだ、話がありそうだけど、つきあつてやれないよ。

少年 「そのひと、何処へ連れていくの？

男2 「こっちが聞きたいくらいさ。

男1 「じゃあ、またな。

男2 「また、来るから。そんときにな。

少年 「うん、また。

少年はしかたなく、また空をみる。

掃除の用務員がやってきて、掃除を始めた。

掃除の用務員 「青い空をみて、フツと溜め息をつく」

看護婦たちが、お昼を手に、やってきた。順に三田鳥サチエ、猪熊ユキミ、由利カエデ、卯の花チズという名札が胸についている。その後ろを婦長の桐花が来る。

三田鳥 「おじさん、いいかしら。」

用務員 「いいよ、ほんとは朝方きれいにしといたんだ。みなさんでお昼かい。」

由利 「おじさんも、一緒にどう？」

用務員 「え、そうかい、じゃあ、弁当を持ってくるかな。(去る)

看護婦たちは、適当にハンケチを敷いて座り込んだ。

少年はベンチに腰をおろした。

猪熊 「用務員の木村さん、まだ独身なんですよ。」

由利 「あら、そうなの。幾つ？」

猪熊 「五十手前だって。」

由利 「へーえ、老けてみえるわねえ。」

三田鳥 「頭がうすいからじゃない？」

猪熊 「それがさ、若いときの写真っていうの、私、みせてもらったことがあるの。そうしたら、なんとこれが、リーゼント！」

由利 「うっそー。」

卯の花 「ああ、でも、昔リーゼントで、いま禿げっていうひと、いっぱいいますよ。

由利 「ええ、何で？」

卯の花 「ドライヤーの使い過ぎが原因らしいですよ。

それぞれ、妙に納得。 「ふーん」

猪熊 「ねえねえ、何だと思う？」

卯の花 「え？」

由利 「禿げの原因なら、ドライヤーなんでしょ。

猪熊 「違うわよ。金田先生よ。院長室に集合だつて聞いたでしょ。

卯の花 「ああ、そうでしたね。

三田鳥 「婦長さん、知ってらっしゃるんでしょ。

桐花 「さあ、聞いてませんよ、私も。

猪熊 「きつと、私、あれだと思ふのよ。

由利 「あれって？」

猪熊 「あれよ。

三田鳥 「ああ、あれね。そうよね、きつとあれよね。

由利 「ああ、あれか。

桐花 「そうねえ、あれだわねえ。

卯の花 「何ですか、あれって？」

猪熊 「こども、きつと前線基地になるんだわ。

桐花 「前線基地つて、まるで戦場の野戦病院みたいじゃないの。

猪熊 「だって、そうなんじゃないんですか。ここから西のエリアじゃ、もう数千人の単位で死者が出てるらしいんですよ。

三田鳥 「そうそう、院長も理事も視察に行ったきりで、まだもどってきてないんですよ。きっと、ミイラとりがミイラになったのよ。

桐花 「ここだけの話ですけどね、院長も理事の方たちも、あちらで、感染発症されたそうですよ。

由利 「じゃあ、今頃。

桐花 「連絡が途絶えてるらしいですからねえ。

猪熊 「そうか、きっとそれで、高村先生、とうとう狼煙をあげたのよ。

三田鳥 「高村先生、やる気かしら。

猪熊 「そうなんじゃないの？

卯の花 「あのお、女性は大丈夫なんですよ？

桐花 「そんなことありませんよ。犠牲者のうち、千人に一人は女性ですよ。

猪熊 「0, 1%の確率か。

桐花 「感染は100%らしいですね。発症が、何故か女性は0, 1%なのよ。

卯の花 「じゃあ、あれですね、エイズのときのHIVとは逆ですね。あれつて、ほら、エッチしてうつる確率つて、女性はほぼ100%だったのに、男性は0, 1%程度だったんですよ。

猪熊 「そうそう、厚生省は、その数値は発表しないで、コンドームのことばかりいつてたんだけどね。

三田鳥 「だって、千人に一人なら、大丈夫だろうって、男が必ずいるからよ。

由利 「男ってそうよね。

猪熊 「あら、カエデさん、そういう経験したの？」

由利 「まさか。想像よ。猪熊さんほどには遊んでないわよ。」

猪熊 「ねえ、私のこと、苗字で呼ぶのよして。とくに由利さんの場合。」

由利 「え、なんで？」

猪熊 「あなた由利カエデって、身体に似合わず、女っぽい名前だからいいけど、私の場合猪に熊で猪熊でしょ。下の名前で呼んでよ。ユキミって。」

由利 「私の名前が身体に似合わずってどういうこと、ユキミさん。」

桐花 「まあまあ、御飯が不味くなりますよ。」

卯の花 「今度のウイルスは、男のひと、ビクビクでしょうねえ。」

三田鳥 「それは、そうよ。なんてったって、感染したら90%発症しちゃうんだもん。」

桐花 「卯の花さん、私たちだって、いつ千人の中の一人になるか分かりませんよ。」

卯の花 「はい。」

猪熊 「だから、きつと、ここも治療の任務にあたるんじゃないかしら。」

卯の花 「でも、ここ、神経症治療の療養施設でしょ。」

三田鳥 「しかも、公共機関じゃないじゃない。保養地の私立の療養所よ。」

猪熊 「このさい贅沢なことといってられないのよ。きつと公共機関以外にも協力要請のお触れが出たのよ。」

桐花 「かも、知らないわねえ。正式なことは聞いてないけど、いずれはそうなるだろうと思ってたわ。」

三田鳥 「ねえねえ、私、聞いた噂では、西のエリアでの犠牲者の数って、数千人といいのは嘘で、ほんとはもう「桁うえの数字らしいわよ。」

桐花 「あら、そうなの。

三田鳥 「女性が発症しにくいのは、遺伝子の性染色体と関係がありそうだって。

卵の花 「なんていいましたっけ、

猪熊 「何が？

卵の花 「ですから、そのウイルス。

猪熊 「ペス・・エーと、

由利 「ペステッチとか、なんとか。

猪熊 「そうそう、ペステイチアじゃなかったっけ。

由利 「感染者のことをペスターっていうんですよ。

卵の花 「それって、ペストと関係あるんですか？

桐花 「ペストはバクテリアでしょ。

猪熊 「ペストバクテリアに寄生したウイルスらしいわよ。

由利 「私は天然痘ウイルスの変形だって聞いたけど。

桐花 「そんな情報、どこで、仕入れたの貴方たち。

猪熊 「インターネット、やってますから。

由利 「私も。

三田鳥 「私もよ。

桐花 「あらそう。テレビのニュースじゃ、よく分かんないっていてもいいよ。

猪熊 「だって、私たちのような医療関係者ですら、たいした情報は知らされてないんですもの。

桐花 「ようするに、あまりよく分からないのよ。世界中が情報を集めることで必死になってるんですからね。

三田鳥 「そのあいだに、死者が数千から数万か。

由利 「テレビのニュースなんかも、パニックてるだけよ。

卯の花 「でも、私たちに何ができるんでしょうか。

桐花 「神経症の療養所でも、病院にかわりはありませんからね。それに、私たちは看護婦ですからね。

と、事務局員の古川がやってくる。

古川 「なんだ、みなさん、こんなところで、香気にピクニックですか。長閑でいいですねあんなたちは。

桐花 「古川さんも、お弁当もっていらっしやいよ。一緒にお昼すれば？

古川 「弁当、お昼、それどころじゃないよ。高村先生、決めたみたいだよ。ここをペスター治療のために開放するみたいだよ。

看護婦それぞれ 「やっぱいい。

古川 「君たちはいいいよ、女だから。こっちは100%の感染率で90%の発症、死亡率だってそれに近いんだからな。その真っ只中に置かれるんだからな。弁当なんて喉、通らないよ。僕は断固反対だ。高村医局長にとりあつて、ここでのペスター治療なんて思い止まらう。

桐花 「私たちだつておそろく感染しますよ。

古川 「発症率は0、1%じゃないか。

桐花 「それでも、千人に一人は死ぬわけですからね。発症した本人にとっては、千人に一人だろうが、同じ100%ですよ。

古川 「そんな、数字の上での詭弁なんていいんだ。僕はもし、医局長がここを開放するなら、荷物まとめて逃げるからね。

猪熊 「闘わずして、敵前逃亡ってわけね。

古川 「僕は医者でも看護人でもない、ただの事務屋だからね。

三田鳥 「どこに逃げたって同じじゃないんですか。

古川 「東のエリアはまだ大丈夫だって聞いたぞ。

三田鳥 「だって、汚染速度はすごく早いんですよ。一人でも東に患者が出れば、同じことよ。東だって駄目よ。

古川 「ともかく、僕は断固反対だからな。ここを封鎖して、外部から環境を遮断して守ったほうがいいのに決まってるんだ。勝ち目のない戦なんかしたってしょうがないんだからな。まったく、高村医局長は何考えてんだか。就任してきて日が浅いんで、点数稼ぎでもするつもりなのかな。（去る）

由利 「古川さん、ほんとに怖がってるみたい。

猪熊 「そりゃあね、男性だもんね。

卯の花 「すぐ隣の町にも、患者さんが出てるんですよ？

三田鳥 「なにいつてるの、死んでるわよもう何十人も。パソコン通信の仲間が知らせてくれたけど、隣の町は閉鎖、隔離よ。

卯の花 「え、もうそんなに。

猪熊 「隣の町からここまでは60キロくらいだから、いくら閉鎖しても、いずれここにも来るわねえ。

三田鳥 「車で一時間の距離でしょ。ウィルスだと、どれくらいかかるのかなあ。

猪熊 「良かった、女で。性染色体さまに感謝よね。

桐花 「男性の患者さんに、不用意な発言で不安感を与えないようにね、みなさん。

看護婦たち 「はい。

由利 「(バドミントンを取り出して) ねえ、やってく?

猪熊 「そうよね。こういうときこそ、明るく生きないとね。

三田鳥 「やろ、やろ。

桐花 「いえいえ、私たちもそろそろいかないと。

看護婦たち、そろりと帰り支度をする。

用務員が来る。

用務員 「なんだ、せっかく弁当持ってきたのに、もうおひらきですか。

桐花 「ごめんなさいね。今日はミーティングがあるらしいの。

用務員 「じゃあ、ひとりで、ただこうかな。(座って弁当をひろげる)

由利 「用務員さんは、怖くはないんですか?

用務員 「怖いって、あの、疫病?

猪熊 「そう。古川さんなんか、パニックしてたわよ。

用務員 「私はねえ、この先、とくに楽しみはないですからねえ。毎日ここの掃除して、寝酒呑んで、寝るだけだから。

卯の花 「えっ御家族は?

用務員 「御家族ねえ、とうの昔にすてられましたわ。はっはっは。これでも、若い頃は浮き名を流

したもんですがねえ。

由利 「リーゼントの頃？」

用務員 「え？」

由利 「いえ、こっちの話。

桐花 「木村さんは、まだ若いじゃありませんか。

木村 「そうねえ、まだ四十九ですから、若いのかなあ。

桐花 「お若いですわよ。

木村 「若い頃から老けてみられたんですよ。頭がこのとおりだし。

由利 「頭はいつから？」

桐花 「これこれ、由利さん。

木村 「リーゼントだったんだけどなあ。・・・

桐花 「さあ、いきますよ。

三田鳥と卯の花を残して、看護婦は去る。

卯の花が、少年に声をかけたのだ。

卯の花 「あなた、お昼すまされました？お昼御飯の時間だけど。

少年 「黙って、屋上の隅に歩くと、また空をみる」

三田鳥 「卯の花さん、あのこはいいの。あなた、新任だからまだ知らないんですけど、あのこがキリコさんよ。

卯の花 「え、ああ、あそこですか。

卯の花は、興味深そうに少年の傍へいくと、

卯の花 「何をみているの？」

少年 「何もみてないよ。」

卯の花 「何かみているようにみえるわ。」

少年 「あなた、新しい看護婦さんだね。」

卯の花 「ええ。」

少年 「感じてるんだ、こうして。」

卯の花 「何を？」

少年 「電波。」

卯の花 「電波？」

三田鳥 「卯の花さん、もう行きましょう。」

卯の花 「はい。でも、

少年 「流れかも知れない。」

卯の花 「えっ、流れ？」

少年 「何かが流れてくるんだ。僕の脳に。」

卯の花 「流れてくるのね、脳に。」

少年 「波の打ち寄せる音かも知れない。」

卯の花 「それが聞こえてくるの？」

少年 「聞こえない。感じられるだけだ。」

卯の花 「それは何なの？

少年 「質問ばかりだね。

三田鳥 「卯の花さん、時間ないわよ。

卯の花 「はい。

三田鳥 「このこは、いつも同じことしかいわないんだから。

少年 「僕は、話したいことなんて、あまりない。

三田鳥 「どこから来るんだっけ、その波や音や電波は。

少年 「(指差す)

卯の花 「あっちは南のほうですね。

三田鳥 「違うのよね(と、少年に)

少年 「ちがうよ。

卯の花 「え？じゃあ、何処？

少年 「未来だ。

卯の花 「未来？

少年 「未来から来る声を聞いているんだ。

卯の花 「何をいつてるの、その声は？

少年 「未来には、君はいないといってる。

卯の花 「あなたが死んだ後のことをいつてるの？

少年 「僕は僕が死んだ後のことなんか、少しも興味はない。

卯の花 「じゃあ、何を聞いているの？

少年 「おまえはそこにいる。そこにしかないといっている。

三田鳥 「そうよね、あたりまえよね。」

少年 「あたりまえのことを、少しもひとは信じようとしなない。ひとは自分が死んだらどうなるかとか、この、たっただいまのことは幻に過ぎないとか、そういうことにしか興味はないんだ。でも、僕は違う。」

三田鳥 「違うのよね。」

少年 「僕にとつて在るのは、この時間だ。こうやって未来にむかって立っている、いまこの時だ。僕は未来の声を聞く。未来は僕に囁く。お前には未来はないと。しかし、お前は、いまこの時間、そこにおいて、未来からの声を聞くことはゆるされていると。」

三田鳥 「寒いわ、少し冷えてきたわ。」

卯の花 「えっ？そうですか？」

三田鳥 「と、いうふうには、半年ばかり前、私もこのこに興味をもって、いまの卯の花さんと同じようなことを聞いたことがあったの。それで、私、いったのよ。『寒いわ、少し冷えてきたわ』って。」

少年 「寒い。でも、僕はこの寒さを感じることがとても幸せに感じられるんだ。」

三田鳥 「と、このこはそうだったの。」

卯の花 「(試しに)今日は少し、暑いわよ。」

少年 「この暑さを感じることが幸せなんだ。」

卯の花 「なあるほど。」

三田鳥 「生きてる証ってわけよね。」

少年 「生きてるのに証などいらないと、未来は囁く。なぜなら、未来などないということが、たっただいま生きているという証拠なんだから。」

卯の花 「あら、私、頭、こんがらがってきた。」

三田鳥 「でしょつ。さ、もうもどりましょ。

卯の花 「ええ。

三田鳥、卯の花、去った。

5

黒い背広を着た背の高い男が急ぎ足でやってくる。
あたりをみまわしているが、何か、みつけたいものでもあるのだろうか。しかし、捜しているものはみつからない。

男 「(少年に) すいません。

少年 「・・・

男 「君、あの、坊や。

少年 「(振り向いた)

男 「ここに、いま男がふたりいなかったですか。

少年 「・・・

男 「私は、怪しい者じゃない。ほら、あの丘の上に小さな家があるでしょ。あそこに住んでいる者です。

少年 「(そつちをみる) あそこ、教会だって聞いたけど。

男 「ええ、そうです。ああみえても、あの家は教会なんです。そこで牧師をしている千堂といいま

す。

少年 「牧師さん？」

牧師 「ええ。」

少年 「また来るっていったよ。」

牧師 「え？」

少年 「あんたの捜している連中。」

牧師 「男たちがですか。」

少年 「ああ、・ええ。」

牧師 「その男たちは、妙じゃなかったですか？」

少年 「妙って？」

牧師 「普通だったですか？」

少年 「さあ、変なことはいってたけど。」

牧師 「変なことって？」

少年 「姿がみえるとか、みえないとか、電波とかハドウとか。」

牧師 「君は、ここの患者さんですね。」

少年 「うん、そう。だから、狂ってるかもしれないよ。」

牧師 「そんなことはないでしょう。ここは、君のようなひとが入院してるんですか。」

少年 「入院？・・・療養っていつてるけど。僕をいれて十五人ばかりいるよ。通ってるひともいるみたいだけど、ひどくないひとはね。」

牧師 「いつからですか？いや、君がここに来たのはいつですか。」

少年 「半年ばかり前だよ。」

牧師 「外には出られるんですか？

少年 「ここ、監獄じゃないよ。

牧師 「ああ、ごめんごめん、そういうふうな意味でいったんじゃないんだけど、そう聞こえたのならすみません。

少年 「僕は殆ど出ないけど。この屋上以外には。

牧師 「じゃあ、知らないんですね。

少年 「もしかして、疫病のこと？

牧師 「ええ、そうです。

少年 「僕はいいんだ、別に死んだって。

牧師 「いえいえ、神様から授かった命です。粗末に考えちゃいけません。

少年 「神様は、自分で命を授けておいて、それで、奪っていくの？

牧師 「ああ、そうですね。うん、そのとおりなんですが。・・・災いは、西のほうから次第にひろまっていますからね。

少年 「少し、牧師のことが鬱陶しくなったらしい」とにかく、また来るっていったよ、男のひとたちなら。

牧師 「そうか、とうとう、ここまで、やってきたのか。じゃあ、気をつけるんですよ。神さまに祈るといいです。

少年 「笑う）ははは。なんて、祈るの？

牧師 「ただ、今日の命を感謝すればいいんです。

少年 「ふーん、じゃあ、そうするよ。なるたけね。

牧師 「それじゃあ、声をかけて悪かったのなら、ゆるしてください。

少年 「いいよ、休憩してたところだから。

牧師 「ああ、休憩の邪魔をしてすまなかったね。じゃあ。（去ろうとする）

少年 「ねえ、（呼び止めた）

牧師 「え？

少年 「さっきの男のひとたち、誰なの？・・・牧師さんの、あなたのお知り合い？

牧師 「うん、いやあ、知ってるといえば、そうなんです。私の仲間の報告では、疫病の流行するところに、奇妙なふたり組の男たちが決まって現れるんです。私は、あの窓からここを何気なくみていて、その男たちらしいのをみかけたんです。

少年 「あなたにも、あの男のひとはみえるんですか？

牧師 「ええ、これでも聖職者のはしくれですからね。

少年 「じゃあ、女のひとも？

牧師 「女のひと？いや、それはみなかったけど、どんなひとですか？

少年 「いいよ、みなかったんだっただら。

牧師 「（口中で何か祈りの文句をつぶやいて、胸に十字をきった）君、名前はなんというのですか？

少年 「キリコ。

牧師 「キリコ？

少年 「キリオだよ。

牧師 「ああ、キリオくんですね。では、神の御加護のあらんことを。（去った）

少年はまた空をみる。

夜の屋上。

高村医局長がスライドを使ってペステイッチウイルスの講義をしている。聞いている病院の看護婦と職員。

高村 「まず、このスライドをみてください。これが、最新の電子顕微鏡で確認されたペステイッチウイルスです。三角形の結晶タイプの構造をもっています。リボソームやミトコンドリアは認められません。まったくのウイルスです。ただし、周囲は一重のカプシドではなく、二重のエンベロープ（膜）になっています。ここからこれは、やや複雑なウイルスであることが分かります。しかも、これまでのどのタイプにも属しません。核酸の塩基配列はそれぞれ三角形の頂点に向けて中心から三方向にのびています。このようなタイプはまったく初めてです。しかし、牛痘ウイルスの発見からおよそ二百年、このような凶暴なウイルスが未発見であったことは、非常に不自然です。現在のところ、天然痘ウイルスであるポックスウイルスの核酸とこのペステイッチウイルスの核酸には、似通った部分が多いという研究成果が発表されています。また、発病者の症状がペスト敗血症に似ているところから、このペステイッチウイルスはバクテリオ・ファージではないかという見方もあります。ただ、みなさんも御存知のように、天然痘ウイルスは地球上では絶滅しているはずなのです。WHOの管理下にあったウイルスは全て焼却されています。いずれにせよ、結論として、ワクチンはありません。これを殺す如何なる方法もいまのところありません。それどころか、このウイルスには、免疫であるマクロファージが働かないのです。従って、ヘルパーT細胞も動き

ません。ただ、不幸中の幸いなのですが、この核酸の遺伝子は、女性の性染色体を嫌います。完全にはありませんが、それを避けています。その間に自滅します。ですから、女性の場合、感染することがあっても、発症することが極めて少ないという報告がなされています。犠牲者は圧倒的に男性が多いのです。

金田 「高村先生、すると、そのペスティッチアウイルスは、人工的に作り出された可能性もあるということなんでしょうか。」

高村 「細菌兵器としてですか。」

金田 「そうとは限りませんが。何か研究用としてとか。・・・」

高村 「いまのところ、なんともいえません。」

桐花 「私たちの対応はどういう対応になりますか？」

高村 「この療養所を、臨時の対策施設として開設以来、すでに、感染者、発症者の幾人かが、ここを訪れています。まず、いままでどおりそれらの人々を、ここで療養中の入院患者からは、完全に隔離すること。空調のダクトを遮断、それから煮沸、ペスティッチアが熱に弱いことはレトロウイルス並みですから。それから、感染者には、ともかく安定剤やスルピリドを投与すること。ほんとうに怖いのは、死ぬことではなく、生きる意志を喪失することだからです。危険な病気ですが、男性においても、生還しているひとはおります。希望を捨てないことです。」

古川 「私たちはどうしていればいいですか。」

高村 「男性の患者をふくめ、すべての患者、業務担当者の寝食は、別棟の部屋へ移ってもらいます。いまのところ、開放しているのは、一階のトレーニング・ルームのみです。二階以上の階は確実に遮断すること。」

古川 「そんなこといって、ほんとうに完全に遮断できるんですか。」

高村 「努力はしなければなりません。」

古川 「抗生物質も無効なんですか。」

金田 「古川さん、インフルエンザに効く抗生物質だってないんですよ。ウイルスに対抗できるのは人間の持っている自然の免疫物質だけです。」

古川 「熱に弱いつていうんだったら、全館暖房にすればどうですか。」

高村 「50度以上にですか？」

古川 「50度じゃないと駄目なんですか。」

高村 「もちろん、それ以上の温度ならなおいいのですがね。」

古川 「私は、過ぎたことをいっても仕方無いとは思いますが、ここを治療のために、いや、治療の方法すらまったく無いのに、開放したのは間違いだったと思うんです。医局長は責任がとれるんですか？」

高村 「個人的な責任の有無を述べている状況ではありません。ただ、世界中の科学者は一丸となつて、このペステイツチアウイルスに取り組んでいるんです。そのために男性の科学者も多く犠牲になつていのです。」

古川 「金田先生、あんた、キリスト教徒なんですよ、こんなこと、どうして神様がゆるしておくんだ。」

金田 「『なぜわたしに狙いを定められる。なぜわたしを負担とされる』『わたしのほうが正しくとも答えることはかなわず、わたしを裁くかたに憐れみを乞うのみだ』『神は無垢なるものも逆らうものも、同じように滅ぼし尽くされる』旧約の『ヨブ記』です。神の試練で悪魔の手により頭のとっぺんから爪先まで、皮膚病となったヨブは灰の中に座り、素焼きのかけらで身体じゅうを掻きむしって痒さをとめようとします。しかし、そのような不幸におとされても、彼はいいます。『神

から幸福を授かったのなら、不幸も甘んじて頂戴しよう』と。

古川 「じゃあ、そういうばいばいじゃないか。押し寄せてくる感染者たちに、あんたそういうばいばいじゃないか。それで、皮膚に黒い斑点を吹き出させた連中は安堵するのか。

金田 「私はあくまで信仰者としての態度を述べているだけです。

古川 「俺は、もし、感染、発症したら、悪魔でも魔女でもなんでもいい、俺の身体をまともにしてくれるほうに一票入れる。患者たちと遮断するたって、あんたたちとはこうして、接触しなくちゃならないんだろ。同じじゃないか。

高村 「古川さん、ここから去るのも残るのも、あなたの意志で決めていいんですよ。

古川 「ちえっ、去るも地獄残るも地獄か。

高村 「それでは、解散します。交代で睡眠をとるようにして下さい。女性であるといっても、油断はできません。免疫は体力の衰えで低下することは、みなさん、よく御存知のはずでしょうから。いまはただ、この新種のウイルスに対抗できる免疫が目覚めるのを、神に祈るしかないでしょう。

三々五々、去っていく。

木村 「古川さん、私の部屋にいらっしやいよ。いい酒があるんだ。

古川 「ああ、いきますよ。どうせ明日のない身体だ。呑んで狂ってたほうがまだ。

木村 「酒で消毒できるかも知れませんが。

古川 「え、そ、そうだな。血液の温度を上げればいいんだもんな。

と古川、木村も去った。残ったのは、高村と金田。

金田 「高村先生。」

高村 「はい。」

金田 「私たちはこの闘いに勝てるのでしょうか。」

高村 「おそらく勝てないでしょう。理性的に判断すれば、私たちに勝ち目はありません。ただ、

金田 「ただ？」

高村 「ただ、しかし、私の感情は私にいうのです。・・・負けはしない、と。」

金田 「負けはしない・・・と、ですか。」

高村 「ええ。」

金田 「感情が先生にいうと、いいますと？」

高村 「金田先生、以前に私、ウイルスが先かホストが先か、そんな話をしたわよね。」

金田 「ええ、はい。」

高村 「私ね、あれから、おかしなことを考えたの。」

金田 「おかしなこと？」

高村 「ペステイッチウイルスは、どうして男性に犠牲者を多く強いるのか。」

金田 「はい。」

高村 「まるで、そのウイルスは女で、男に恋をしているみたいじゃない。」

金田 「恋ですか。」

高村 「ええ、そう。ペステイッチウイルスだけじゃないわ、ありとあらゆるウイルスは宿主細胞に恋焦がれて、互いに身を滅ぼしてしまうのじゃないのかしら。それならウイルスの存在する理

由も、私たちホストとの関係もよく分かる。だから、だから私の感情は判断する。たとえ理性が勝ち目のないことといおうとも、負けはしないと。

ふたり、去った。

7

誰もいなくなった屋上に、あの男ふたりがやってくる。

男1 「ほんとにこれで終わりだろうね。

男2 「終わり、終わり。ああ、よく働いたなあ。

男1 「カズさんは、この仕事、何年めになるの？

男2 「何年めっていったって、俺たちには時間なんかあつてないようなもんだからな。

男1 「ああ、そうだね。

男2 「まったく、こっちのほうで刑罰を受けてるような身分だぜ。

男1 「まったく。早く交代してもらいたいよね。

男2 「クロさん、みるよ、星がひとつも出ていない。

男1 「ああ、ほんとだね。昼間あんなに青く晴れていたのに。

男2 「もっとも、俺たちにはみえないのかも知れないけどな。

男1 「ああ、ほんとに満天の星空だったりしてな。

男2 「しかし、たいへんな騒ぎようだな世間は。

男1 「だって、何万人も死んでるんだからね。」

男2 「ウイルスつてのは、あれだってな。何かに寄生しないと生きていけないんだってな。なら、なんで、寄生した相手を殺しちゃうんだろうな。お互い損じゃないか。そうだろ。寄生する相手がいなくなったら、どうするんだろ。」

男1 「俺はさ、面白い話を聞いたことがあるよ。」

男2 「ウイルスのかい？」

男1 「そう。あのさ、人間てのは脳と身体があるじゃないか。」

男2 「まあ、そういうふうにいえばな。」

男1 「俺のダチは解剖医学かなんか、やってたんだけど、そいつの考えでは、はるかな昔、この人体に脳というのが寄生したんじゃないかっていうんだ。」

男2 「脳が、肉体に寄生したっての？」

男1 「そうそう、だから、俺たちは自分の脳のことと身体のことともいまひとつ、自分のものでありながら、よく分からないんじゃないかってさ。」

男2 「そりゃ、面白い御意見だな。で、そいつはその後、そんな研究してんのか？」

男1 「死んだよ、三日ばかり前に。」

男2 「ウイルスで？」

男1 「交通事故。」

男2 「そりゃあ、トンマだなあ。」

ふたり、クスクス笑っていると、あの牧師がいつの間にか立っている。

牧師 「禍々しい者たちよ。

男1・2 「振り向く」

牧師 「災いの使徒たちよ。

男1 「誰、あんた？」

牧師 「私はこの先の教会の者だ。

男2 「アーメン屋さんか。

牧師 「ひとをギョーザみたいにするのはよせ。

男1 「何か、用事ですか。

男2 「そりゃあ、用事だろ。俺たちのことがみえるんだから。

牧師 「ハルマゲドンで、やがて駆逐される悪霊よ、立ち去るがよい。

男1 「なんだ、ハルマゲって。

男2 「秋田県の、

男1 「そりゃ、ナマハゲだろ。

男2 「じゃあ、

男1 「そりゃ、ハルマキだろ。

男2 「まだ、何もいってないけど、そのようなことをいうつもりだった。

牧師 「いいかげんにしろ。

男2 「用件があるなら、手短かに頼むわ。俺たち今日は疲れてるから。

牧師 「私の友人は西のエリアでおまえたちをみた。疫病の蔓延する前、疫病が、その地方にひろがる前におまえたちをみているんだ。誰にもみえないはずのおまえたちをみる事が出来るのは、私たち聖職にある者の特権だ。世界を疫病の恐怖に陥れているのは、汝らの主の仕業だな。

男1 「なんか、時代がかつてるね、このひと。」

男2 「それにしても、ここまでよく来れたね。ここの病院は二階から上は遮断されて、隔離されてんじゃないの？」

牧師 「非常階段をつたうようにあがってきたんだ。それもこれも、おまえたちの姿を眼にしたからだ。私の祈りが勝つか、おまえたちの呪いが勝つか、ここは神の御加護を頼むしかない。(何やら祈りの文句を唱え出した)」

男1 「完璧に勘違いしてるんじゃない？」

男2 「どうやら、そのようだな。」

男1 「今度の騒ぎが俺たちのせいだと思ってるんだ。」

男2 「そうみたいだな。」

男1 「どうする？」

男2 「帰ろ。つきあつてると疲れそうだから。」

牧師 「(祈りながら、倒れてしまう)」

男1 「おい、どうしたんだ。」

男2 「脳卒中かな。」

男1 「(近寄って抱える) 世話がやけるな、この手合いは。」

男2 「ちょっと待てよ。・・・と、牧師の腕をまくる) はーん、この斑点は、ウイルスにやられたな。」

男1 「感染してんの？」

男2 「発病だけ、これは。」

男1 「あれまあ。で、じゃあ、どうする？」

男2 「しやうがないな、まったく。下に運ぶか。

男1 「えー、また運ぶのかい。

男2 「それが、因果と思うしかないな。

男1 「余計な仕事をふやしやがって、まったく。

男2 「もんくいうない。それ、担ぐぞ。

男1 「神の御加護とやらはどうしたんだろうな。

男2 「そんなこといったって、今度のウイルスじゃ医者も死んでるんだからな。

男1 「そりゃまあ、そうか。

男2 「坊主が死んだって不思議はないわさ。

ふたり、牧師を担いで、去った。

8

何日か後の病院の屋上。

同じような青空が真昼を支配している。

その下でバドミントンに興じる看護婦たち。

少年は、いつものように、空の果てに眼を投じている。

誰かの打った羽根が空にあがる。

落下するところにいた卵の花は、ポカンと空をみたまま、それを打とうとしない。

由利 「卵の花さん、なんしてんのよ。」

卵の花 「え？」

猪熊 「え、じゃないでしょ、羽根、羽根。」

卵の花 「あら、私んところへ飛んできました？」

三田鳥 「もう、ボンヤリしてるだから。」

卵の花 「すいません、空をみてたら、あんまり青いんで。」

猪熊 「青いから、何よ。」

卵の花 「何だか、どうでもいいような気になって、というか、

三田鳥 「ボンヤリしてたんでしょ。」

卵の花 「いえ、そうじゃないんです。何だかとても気持ちよくなって。」

由利 「やだなあ、感じやすい女やったの？」

卵の花 「何ですかそれ？」

由利 「空の青さに愛撫されて感じちゃったとか。」

猪熊 「由利さんがそんなこといっても、ぜくぜん似合わない。」

由利 「じゃあ、猪熊さんなら、似合うの？」

猪熊 「やめてっていつてるでしょ、苗字で呼ぶのは。私はユキミなんだから。」

三田鳥 「いいから、卵の花さん、打つてよ。」

卵の花 「あ、はい。(と、羽根をもつが、また空に見入ってしまう)

三田鳥 「ちよっとお、卵の花さんてば。」

卵の花 「えっ？ああ、すいません。」

猪熊 「大丈夫？」

卯の花 「でも、なんだか、空、スゴクありません？

猪熊 「（見上げて）青いわねえ。

由利 「海の底から上みてるみたいね。

三田鳥 「まあ、詩人ねえ、由利さん。

卯の花 「なんだか、みいんな嘘みたいに思えてきて。

由利 「え？

猪熊 「みいんな嘘って？

卯の花 「みいんなです。

猪熊 「裏の空き地に死体がゴロゴロしてることも？

卯の花 「はい。

由利 「トレーニング・ルームで身体中斑点だらけの患者が唸ってることも？

卯の花 「はい。

三田鳥 「東のエリアの感染者が三万人をこえたことも？

卯の花 「ええ、みいんな嘘みたいで。

猪熊 「そうねえ。（空をみる）

由利 「そうねえ。（空をみる）

三田鳥 「そうかあ。（空をみる）

卯の花 「私たちだけ、こんなに元気でなんだか悪いみたいですね。

猪熊 「しようがないじゃん。

由利 「とにかく、打ってよ。

卯の花 「はい。（打った）

またバドミントンに興じる看護婦たち。
やってくる高村と金田、そして、桐花。
気づいて、やめようとする看護婦たち。

高村 「いいのよ、やめなくて。金田先生、私たちもまけてもらいましょうよ。

金田 「え、いいんですか。

桐花 「でも、高村先生は、もう三日も寝てらっしゃらないじゃありませんか。

高村 「効くのよねえ、アムペトアミン。

桐花 「ええ、あれ、やってらっしゃるんですか。

高村 「非常時だから、いいのよ。それにちゃんと、食べてるから。

と、彼女たちも交えて、バドミントンの始まる。

しばし、バドミントンの饗宴だ。

おそらくそこは世界中で最も健康的な時間と場所だろう。

と、少年が、ポケットの新聞紙を床に敷くと、その上に立ち、剃刀を手首にあてる。

桐花がそれに気づいて。

桐花 「キリコさん、なにしようとしてるんですか。

少年 「空があんまり青いので、死にたくなってきたんだ。

桐花 「おやめなさい。

少年 「大丈夫、汚さないように、新聞紙を敷いたから。

桐花 「そういう問題じゃありません。

少年 「赤い虹をみせてあげるよ。

桐花 「剃刀を取り上げて）いけません。

少年 「この青空には、僕の血がよく似合うと思ったのに。（といつつ、倒れる）

駆け寄る、看護婦たち。

金田 「少年を診て）すごい熱です。首に小さな黒斑がみとめられます。

高村 「下に運んでちょうだい。

桐花 「なんて、運が悪い。千人に一人だというのに。

金田 「しかたありません。神の摂理の前には、誰もが平等ですから。

看護婦たち、少年を運んでいく。

金田 「遮断、隔離しておいたのに。しかもよりによって、うちの患者の発症者の第一号が女性だなんて。まさか、自身を男だと思いつ込んでいることと、関係あつたんでしょうか。

高村 「それは無関係ね。偶然よ。

金田 「そうすると、他の患者さんにも感染者がいる可能性が高いですね。

高村 「覚悟していたけれど。来るべきものが来たって感じね。

金田 「世界は、人類はどうなるんでしょうか。」

高村 「金田さん、あなたの神さまなら、どうされると思います？」

金田 「ノアやバベルやソドムのように、まさか、人類とこの世界をチャラにしようなどと、そんなこと私には、信じられません。」

高村 「さあ、いきましよう、私たちも。いつて闘いましょう。みえざる敵との戦闘はまだまだつづくわよ。」

金田 「みえない敵との闘い。なんて象徴的なんでしょう。いつもいつも、ひとはみえないものこそを敵にしてきたような気がします。」

高村 「なんて頼りない存在なんでしょうね、人間は。自分の内なる世界も、外の世界も、あまりにも知らなさ過ぎる。いいえ、知らないということにすら気がつかないでいるんだは、私たちは。」

金田 「この右手、この左手、幾人もの人々を治療してきたはずのこの両の手の、指の数よりもまだ、私たちの知っている、私たちにみえている、私たちの所有している世界のほうが少ないんですね、きっと。」

桐花が駆けてくる。

桐花 「高村先生、金田先生。」

金田 「どうしました、彼女に何か？」

桐花 「いいえ、古川さんが。」

高村 「古川さんが、どうしたんです。」

桐花 「院長室にあった猟銃を持ち出して、それで、みんなにここを出ていくように命令してるんで。」

す。

驚いて、桐花をみる高村と金田の視線越しに、看護婦たちが、走って逃げてくるのがみえた。その後を、猟銃を構えた古川が、追ってくる。

古川 「いわんこつちやないんだ。そらみる、遮断だの隔離だの、何の役にもたちゃしない。冗談じゃない。ここは俺が占拠する。みんなこの療養所から出る。トレーニング・ルームの死にかけの連中を背負って、みんな外へ出る。俺に近寄るな。近寄るとぶつ放すぞ。

金田 「古川さん、落ち着いて下さい。

古川 「俺は充分に理性的だ。いや、俺だけが理性的なんだ。勝ち目のない闘いをしないだけ、俺は正常だ。

金田 「いまさら、あなた人殺しするの！

古川 「殺したくないが、こんな事態だ。ひとりやふたり、死んだって同じだろ。なんにもアテになりやしない。医者も坊主もみんな死ぬ。てめえらだけノホホンと生きていられると、腹がたつ。俺に近寄るな。俺は生きるんだ。死んでたまるか。

高村 「どうやって生き延びるつもり？

古川 「無菌室を作る。そこに俺は籠もる。

金田 「そんな設備は、ここにはないわ。

古川 「いいか、よく聞くんた。おまえらはもう、俺にとつては、ウイルスと同じなんだ。おまえらがうろうろすることと、ウイルスが拡散することは、同じなんだ。だから、おまえらさえ消えれば、ここは無菌状態だ。もう、みんな感染しているに決まっている。だけど、俺はごめんだ。俺は生き

る。

金田 「そんなこと、ほんとに生きることとは違う。

古川 「そういう説教は、信心深い連中にしてやりゃいい。

高村 「鎮静剤でも注射したほうがいいみたいね。(近寄る)

金田 「処置室に運んで。それから、外科病院と連絡。

桐花 「はい、分かりました。

看護婦たち、高村を運んでいく。

ひとり残った金田、行こうとするが、ふいに振り向くと、キツと拳を結んで天を仰ぎ、

金田 「エリ エリ ラマ サバクタニ エリ エリ ラマ サバクタニ。わが神よわが神よ、何故に我を、みはなしたまう。主よ、何ゆえに、我等にかくも過酷な試練を与えたもう。

9

明け方、薄青い空の下。屋上。ベンチに座っているのは、あの女だが、少年キリコと同じ柄模様のパジャマを着て、ノートに何やら筆記している。

夜勤明けの高村が煙草をくゆらしているが、やがて去る。

他には、誰もいない。

女（「ノートに何やら書き終わると、それを閉じて） エリ エリ ラマ サバクタニ エリ エリ
ラマ サバクタニ。わが神よわが神よ、何故に我を、みはなしたまう。主よ、何ゆえに、我等に
かくも過酷な試練を与えたもう。

あるとき、あるひとの前に神と名乗るものが現れた。それは自分のことを神だといった。でも、そ
のひとはそれを神だと思わなかった。認めなかった。そうすると、どうなるのかしら。

『この地上に大地を据えたもの、朝日や曙に役割を指示したもの、それは我なり。汝は海の湧き出
るところまで行き着き、深い縁を巡ったことがありや。死の門を作りし者は我なり。死の闇の門を
みし者も我なり。光が何処にあるかを指し示すのも我なり。雪の降りくるところ、霰の落ちくると
ころを知りし者、またそうさせている者は我なり。風の道、豪雨の水路、稲妻の落雷も我のなせる
業なり。銀河を創造し、天の法則を作りたるも我なり。洪水をおこし、鳥を囀（さえず）らせ、す
べての動物、植物を創造した全能のの者、それが我なり。汝、かくなる我を責め立てるや、答える
がいい』旧約聖書、ヨブ記、38章、39章。・・・

どんなに神様が御自分の力を誇示なさろうと、知らんぷりすることはできる。逆に、信じてしまえ
ば、たとえ、神でない何者でも、そのひとにとっては、神以外の何者でもないし、そのひとがそれ
を信じなければ、それは神ではないのよ。信仰とは、それが神であるということ、ひとが、決定
することよ。

そうすると、そうすると、・・・ひとの信仰の数だけ、神は存在するということになる。そのひとの
神がそのひとにのみ存在するのよ。ほんとうの神はきつとこう思うはずよ。人間というのは、なん
と楽天的な存在なのかと。

ほんとうの神、そういってはみたけれど、そのようなものがほんとうの神なのかどうか、それもひ
とが決めることなのね。では、ほんとうにほんとうの神というのは何なのでしょう。ああ、いくら

考えても堂々廻りで、眼がまわる。

そうなのよ。私たちはついにそれを語ることは出来ないのだから。なぜならば、語りえぬものこそが神なのだから。

語りえぬものにたいして、私たちがとるべきことは、ただひとつ。沈黙することだけよ。エリ エリ ラマ サバクタニ。かつて、神の沈黙を嘆き、呻吟した者たちには、こういえばいいのよ。沈黙すべきは私たちのほうなのだ。

でも、ここには、世界がある。そうして私がいる。そうよ、これ以外にいったい何が存在するといふの。これ以上に何を私たちは望むというの。超越した存在は、ただ、超越していればいい。私はここに在るわ。世界はここに在るわ。私と世界がここにはあるわ。

もうすぐ、ここに太陽が昇るでしょう。金色の朝日の光の中に私たちはつつまれるでしょう。そのとき、この青空の下で、私たちは、きっと気づくにちがいない。

太陽は誰のために昇ってくるのか。

金色の輝きは誰の瞳の中に弾けるのか。

この青空はいったいなんのために、かくまで青く私たちの頭上をおおうのか。無限の宇宙に生まれ、たとえ刹那に死んでも、一瞬の永遠は私のためにある。血は私と世界をつないで流れる。

『空があんまりアオイので

死にたくなってきたけれど

この寂寞も荒涼も

この虚無も厭世も

この憂鬱も倦怠さへも

みんな私のものだから
みんなたいせつなものなのだ

私が誰のものでもない

私だけの眠りにつくまえに

私はすこし泣いておこう

それからココロのカタチをしたため息を

ふううっと空にはいてみよう』

生きましょう。だから、生きていきましょう。私たちはぜんぜん、悲しむことはないわ。私たちこそは、この世界に、恋を、している存在なのだから。

太陽はすっかり顔を出した。青空が染みてきた。

用務員の木村さんが、掃除にやってきた。

女は、笑顔を満面にたたえて、その木村さんにペコっと頭をさげた。

女 「おはようございます。

木村 「急にいわれたので、やや、とりみだして、モゴモゴしている」

女は、そのまま、去っていく。

木村さんは、その潑刺とした後ろ姿にしばし見惚れていたが、掃除をはじめ。

音楽 『たそがれのワルツ』 流れて。

1
9
9
7
0
9
0
1

了